

## 周之標編著活動考

岩崎, 華奈子  
九州大学 : 専門研究員

<https://doi.org/10.15017/2202969>

---

出版情報 : 中国文学論集. 47, pp.70-87, 2018-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

## 周之標編著活動考

岩 崎 華奈子

### 一 問題の所在

明代の神魔小説『封神演義』には、李雲翔<sup>①</sup>・褚人獲・周之標による計三種の序文が存在する（以下それぞれ「李序」「褚序」「周序」と呼称）。李序は、現存最古の明版と目される舒載陽・舒冲甫刊本（国立公文書館蔵）のみに掲載され、出版の経緯を語る唯一の序文である。褚序は、明末清初の文人褚人獲が『封神演義』を校訂し出版した際に著したもので、清代以降の多くの版本に掲載されている。以上の二序が比較的多くの読者や研究者の目に触れてきたのに比べ、周序はこれまで注目されることがほとんど無かった。序文の内容に重要性が見出されず、選者周之標の人物像も不明であることがその要因であろう。しかし『封神演義』の版本系統や成書の経緯を検討する上で、十分注意すべき序文と考えられる。まず、無窮会織田文庫所蔵の上図下文の文簡本は周序のみを「封神演義序」（傍点は筆者による。以下同）と題して掲載する。また褚序を冠する版本（文繁本）の一部が周序を「封神演義原序」として掲載することから、褚人獲は周序本を校訂の原本としたことがわかる（ただし、その原本が文簡本であったとは考え難い）。加えて、織田文庫蔵本は舒本よりも古い本文を留めている可能性が指摘されており、李序と周序の先後も問題となる。仮に周序がより古い序文であるならば、舒本を現存最古のテキストとする通説の妥当性や、李序の語る出版経緯の信憑性も再検討が必要になろう。

本稿では周序の内容検討に先立ち、まず序文撰者である周之標についての調査結果を報告する。彼が編纂した書

籍の序跋や内容等を中心に、その活動の内容および時期、交友関係を明らかにすることで、『封神演義』周序の理解、ひいては作品研究に資することを目的とするものである。

## 二 周之標の編著活動

正史や地方志に周之標の伝は立てられていない。彼の著作等に書かれた署名から、字は君建、長洲（現江蘇省蘇州）の人であることが知れる。その編集・出版活動を整理した先行研究として威昕「明代女性出版家周之標」（『新世紀図書館』二〇一二年第十期）<sup>6</sup>、王麗媛「周之標編輯出版活動叙録」（『大衆文芸』二〇一四年第二十期）がある。活動内容ごとに分類すると以下の通り（括弧内は本稿中の呼称）。

### （一）編纂

- ① 『吳歛萃雅』四卷
- ② 『新刻出像点板增訂樂府珊瑚集』四卷（『珊瑚集』）<sup>8</sup>
  - （2） 花案
- ③ 『吳姬百媚』二卷附一卷
- ④ 女性詩文集
- ③ 『女中七才子蘭咳集』五卷（『蘭咳集』）
- ④ 『女中七才子蘭咳二集』八卷（『蘭咳二集』）
- ⑤ 文言小説集
- ④ 『古小説香螺卮』十卷（『香螺卮』）
- ⑥ 駢文集
- ⑤ 『四六瑄朗集』八卷

周之標編著活動考

(二) 鑑定・参関

⑧ 胡貞波『周君建鑑定古牌譜』二卷（『古牌譜』）

⑨ 沈自晋『広輯詞隱先生增訂南九宮詞譜』二十六卷（『南詞新譜』）

(三) 序文

⑩ 『新刻鍾伯敬先生批評封神演義』（『封神演義』）

⑪ 『鐫李卓吾批点残唐五代史演義伝』（『残唐五代史演義伝』）

(四) その他（感論文・王論文には未載）

⑫ 『万錦清音』花集「空閨感夢」

⑬ 『買愁集』卷三哀書「天涯女子」「小青焚余詩」批語・唱和詩賦<sup>⑬</sup>

筆者は先行研究をふまえて、改めて著述内容や関係人物等を調査し、周之標の事蹟をより詳細に考察した。その結果を以下に記載する。ただし白話小説に関わる⑩⑪については本稿では割愛し、稿を改めて論じたい。

① 『呉歛萃雅』四卷

中国国家図書館、復旦大学図書館、国立故宫博物院（台湾）等蔵。影印が『善本戲曲叢刊』<sup>⑩</sup>に収録される。

南曲の散曲選集。元・亨・利・貞の四卷に分かれ、前二卷は散曲、後二卷は戲曲（伝奇）からある一段を抜粋した、いわゆる散齣を収める。各巻頭に「茂苑 梯月主人選輯／古呉 隱之道民校點」とあり、巻首に周之標の「題辭」二件と、梯月主人の「小引」および「呉歛萃雅選例」、「呉歛萃雅曲律（魏良輔曲律十八條）」を掲載する。ただし、中国国家図書館所蔵の八冊本（善本・索書号一二四〇九）は二件の周之標「題辭」の間に梯月主人の「叙呉歛萃雅」を有し、この「叙呉歛萃雅」の末尾に「萬曆丙辰菊月哉明茂苑梯月書」、「小引」の末尾に「丙辰臘月望日梯月主人走筆漫題」とある。万曆丙辰は万曆四十四年（一六一六）<sup>⑮</sup>。

周之標の名は題辭にしが見えないが、王重民『中国善本書提要』（上海古籍出版社、一九八三年）では選輯者の梯月主人がすなわち周之標であり、周之標は明代万曆頃の画家周之冕（一五二一—？）の兄弟行ではないかと推測す

る。<sup>⑫</sup> 梯月主人という号は張説『宣室志』所収の「周生」という故事に由来する。唐の大和年間、道術を善くする周生という人物が、数百の箸に繩をかけて梯となし、それをを用いて月を取ってきた、という内容である。後述する『蘭咳二集』の支如増序にも、「古に周先生なる者有り、筋數百条を取り、繩數百条を取り、繩あみて以て之に駕し、曰く、我此に梯して月を取らん、と（古有周先生者、取筋數百条、繩以駕之、曰我梯此取月）」と「周生」の故事を引いており、これに對比して周之標を「今之周先生」と呼んでいることから、梯月主人はすなわち周之標の号の一つと考えられる。<sup>⑬</sup>

この散曲集は鑑賞者向けではなく、歌手の実用に供する目的で作られている。巻首「吳歛萃雅選例」には曲牌の正確さや発音、押韻の表記に配慮した旨がアピールされ、実際に正文中の歌詞には様々な記号が附されている。

## ② 『新刻出像点板增訂楽府珊瑚集』四卷

中国国家図書館、国立故宫博物院（台湾）蔵。影印が『善本戲曲叢刊』<sup>⑭</sup>に収録される。

『吳歛萃雅』の続編にあたる散曲選集である。文・行・忠・信の四卷に分かれ、各卷の構成や演者向けである点も『吳歛萃雅』に等しい。各巻頭に「吳中宛瑜子手定」とあり、巻首に周之標「増訂珊瑚集小引」および来虹閣主人「凡例」を掲載する。王重民『中国善本書提要』では宛瑜子と来虹閣主人を周之標の号とする。周之標の小引に、「珊瑚集」の増訂を自ら行った（仍屬余手増訂」と記されているためである。宛瑜子については次章にて検証したい。王重民はさらに天啓帝朱由校の「校」字を避諱しない点から、万曆間の刻本であろうと推定している。<sup>⑮</sup>

本書には刊記や序年が見えない。しかし以下の記述によって、ある程度、成立時期を限定することは可能である。「凡例」の第一条に「此の刻、名は其の舊きに傳よるも、曲は其の新たなるを摘す。即ち戲曲は『西樓』の如く、『千古快』の如く、『鸚鵡裘』の如く、俱に新出の傳奇にして他刻中の未だ載せざる所なり（此刻名仍其舊、曲摘其新。即戲曲如『西樓』、如『千古快』、如『鸚鵡裘』、俱新出傳奇、他刻中所未載）」とある。巻四（信集）に袁于令『西樓記』『鸚鵡裘記』および周之標『千古快記』から抜粋した曲が収められている。このうち『西樓記』は徐朔方「袁于令年譜（1592～1674）」（『浙江社会科学』二〇〇二年第五期）によれば万曆三十八年（一六一〇）の作という。また『鸚鵡裘記』についても、何焜婷「『鳳求凰』改夔自『鸚鵡裘』之考辨」（『蜀学』第八輯、二〇一三年）によれば『西樓記』と同時期の作品という。周之標の戲曲については、『遠山堂曲品』の著者たる祁彪佳

(一六〇二—一六四五)が崇禎二〜三年(一六二九—一六七〇)に袁于令に宛てた書簡の中で、周之標の「新曲」や、「新本」の『千古快記』を見せてほしいと求めている。

以前に仁兄が了承してくださった諸曲の、古曲は「黄孝子」・「十孝」等、新曲は周君建の作、これらは甚だ渴望していたもので、知己に頼まなければ再び求められるものではありません。<sup>17)</sup>

仁兄がもし佳作の伝記を見かけたなら、どうか記録係に命じて書きとめていただきたい。私はその筆写の礼金を用意して、何かのついでにお送り頂けることを待ち望んでいます。以前、私の手紙で熱心にお願ひしたのは古い作品です。新しいものとしては、周君建の「十快」・「魏璫伝奇」、范香令の「花筵賺」・「楊雄斑管」、顧九疇乃翁の「天公醉」なども、すべて一目見てみたいです。どうぞ仁兄のお心に留めおきください。<sup>18)</sup>

つまり『珊瑚集』は「呉歛萃雅」成立の万曆四十四年(一六一六)以降崇禎三年(一六三〇)以前、かつ袁于令「西楼記」「鸚鵡裘記」の成立した万曆三十八年(一六一〇)からもさほど遠くない時期に増訂されたであろう。「校」字を避けない点も併せると、万曆・泰昌間の成立と考えられる。

### ③ 『呉姬百媚』二卷附一卷

中国国家図書館、名古屋蓬左文庫蔵。中国国家図書館蔵本の影印は『中華再造善本』(明代編子部、北京図書館出版、二〇〇二年)収録。巻一卷頭に「呉下宛瑜子編輯」、巻首の宛瑜子「百媚小引」末尾に「丁巳夏日呉下宛瑜子醉筆戲題」とある。丁巳は万曆四十五年(一六一七)。前述の『珊瑚集』と同じく宛瑜子はすなわち周之標と見なされてきた。<sup>19)</sup>ただし書中に周之標の名は一切見えない。一方、大木康氏は宛瑜子を俞琬綸(一五七八—一六一八)とする。<sup>20)</sup>やはり次章にて検証する。

蘇州の妓女を品評した花案(花榜)である。総勢五十六名の妓女を科挙になぞらえて一甲・二甲・三甲と順位付けし、二甲以上の二十九名については一人一面、計十五葉二十九面の図像を「呉姬圖像」と題して描いている。また妓女各人を花に喩え、彼女たちを歌った詩詞・賦・曲・呉歌を連ね、最後に「総評」を加える。評語には宛瑜子と友人および妓女たちのエピソードが語られる部分もあり、例えば附六名会魁の劉翩(巻上)の評に、彼女と馮夢龍との関係が述べられる。宛瑜子は馮夢龍と妓楼に集う仲間であった。<sup>21)</sup>

④ 『女中七才子蘭咳集』五卷

中国国家図書館蔵。『中華再造善本』（明代編集部、国家図書館出版社、二〇一二年）収録。封面や序跋・目録等なく、欠葉も多い。内容は、女性詩人の作品と、男性文人による唱和や批評、詩人伝記等を集めたアンソロジーである。巻一に馮小青、巻二・三に王修（王修微）、巻四に尹紉榮・杜瓊枝・劉玄芝、巻五に会稽女子・徐安生・余五娘を収録。巻頭に「長洲周之標君建甫選輯」とあり、収録作の題下や末尾に周之標の評語が附される。

『中華再造善本続編総目提要』（注20参照）では書中の支如璿「小青伝」、汪大年「会稽女郎詩序」の紀年や『呉歎萃雅』の刊行が万曆年間であることから、周之標の刻書活動そのものを明末に限定し、本書も明刻本であるとす。しかし、本書は清刊本と考えられる。巻四の周之標「附李宗定姬人劉玄芝宮詞百首之三十七」の序に本書の成立経緯が次のように語られている。

余偶ま輯する『蘭咳集』成り、之れを青門申少司農に質す。其の長日無事にして、讀書して自ら娛しむを知り、必ず餘間有りて吾が玄晏と爲さんとするなり。青門は性慧く、一目に十行俱に下し、笑いて余に謂いて曰く、「七才子は子の表して之れを出だすを得、……然れども都是れ怨姫愁女、且つ大半は小星の列に在り。尹少君と劉晉仲解元とは伉儷の雅有り、晉仲又た子の友なり。留めて以て閨中の七才子の、徐小淑・陸卿子の輩の如きを待ち、更に子の表して之れを出すを得れば、豈に炳炳烺烺として、更に千古に足らざらんや。」……青門復た難弟霖臣の所従り『露書』一冊を搜し得、劉玄芝「宮詞」百首を載せる有り、選びて三十七首を存し、余の取りて尹少君詩に代えんことを欲す。余咲いて曰く、「兩才豈に相い厄いとならんや」と。遂に集中巻四の後に附し、先ず以て諸を海内に公にす。當今固より才に乏しからず、閨中七才子、更に訂を爲して之れを入るるも可ならん。

周之標は「青門申少司農」に『蘭咳集』の序を請うた。すると申は、採用されている女性詩人はみな不遇な者ばかりで、そのほとんどが妾の立場であるのに、独り尹少君（紉榮）は周之標の友人劉晉仲の妻である、と指摘し、尹を除いて別の女性詩人を掲載するよう薦めた。結果的に劉玄芝の「宮詞」百首から申が選んだ三十七首を、尹紉榮詩の後に追加し、「七才子」と題しながら八名の女性詩人を掲載することになった、というものである。

『蘭咳集』の序を依頼され、その編集方針にも助言を与えている「青門申少司農」とは、申紹芳（一五九一—一六五三）、字は維烈、また青門、周之標と同郷の長洲人で、万曆四十四年（一六一六）の進士。万曆十一（一五九一）—一五八三—一五九一）に内閣大学士を勤めた申時行の孫である。南礼部郎中、山東按察使、福建按察使等を歴任し、崇禎帝崩御の後は南明政權に加わり、崇禎十七年（順治元年、一六四四）戸部右侍郎兼都察院右僉都御史に任じられ、南京陥落後に郷里に戻った。翌年の順治二年（一六四五）七月には、清の李延齡が蘇州入城の際に殺戮を行わなかったことを顕彰する石碑を建てている（『欽命總督刑部侍郎李公再造吳民碑』）。その経緯については滝野邦雄「蘇州における李延齡の伝説について」（『経済理論』第三七六号、和歌山大学、二〇一四年）に詳しい。これによれば、申紹芳は元々李延齡と関係があつたため、清軍に協力して一族の保全を図つたと推測されるという。以上を踏まえて、先に引用した周之標の文章を見ると、申紹芳が「少司農」（戸部侍郎）と呼ばれ、「長日無事、讀書自娛」の状態にあつたのは、南京の南明政府を離れ、故郷蘇州で一族の安寧を獲得した順治二年以降であるに違いない。すなわち周之標が『蘭咳集』について申紹芳と議論した時期は、順治二年から申の没年順治十年までの九年間に限定され、刊行はその更に後ということになる。

『蘭咳集』巻五にはこの申紹芳による「和会稽女子詩首韻」が収められ、また後述する『蘭咳二集』と『香螺卮』にも彼の名が見える。申紹芳は周之標の多くの編著活動に関与した重要な人物であると言えよう。

### ⑤ 『女中七才子蘭咳二集』八卷

国立公文書館蔵。封面に藍墨で「周君建先生評選」「女中七才子」「金閨寶鴻堂梓」とあり、さらに朱墨で「呉片霞 浦湘青 沈宛君 王文如 徐小淑 余其人 陸卿子」と収録の女性詩人を列挙する。『蘭咳集』の続編にあたるもので、先述の周之標「附李宗定姪人劉玄芝宮詞百首之三十七」の序（『蘭咳集』巻四）において申紹芳が推薦したという徐小淑と陸卿子が、本書に選抜されている。

目録前に支如增「蘭咳二集序」と「蘭咳二集參訂社友姓氏」があり、支序の末尾に「武水盟弟支如增書于清旦閣」との署名がある。支如增は字は小白、嘉江の人で崇禎三年の副榜。父の支大綸（生卒年未詳、万曆二年の進士）の別集『支華平先生集』四十卷附録一卷（国立公文書館・中国国家図書館蔵）を編集しており、その版心下にも「清



且「閣」と刻される。また「参訂社友姓氏」には総勢一〇四名が列挙され、曹学侏・范景文・林古度・袁中道などの著名文人の名も見える。ただし、范景文・袁中道は初集たる『蘭咳集』の推定成立時期（順治二、三十年）には既に死亡しており（范景文は崇禎帝に殉じて崇禎十七年（一六四四）没、袁中道は天啓六年（一六二六）没）、その後を継ぐ『蘭咳二集』を「参訂」した事実があるのか疑わしい。そのほか『蘭咳集』編纂に関わった申紹芳をはじめとして周之標の他著にも名に見える人物が複数含まれており、周の交友関係を示す重要な資料と言える。

⑥ 『古小説香螺卮』十卷

東京大学総合図書館にのみ蔵する孤本。黄霖「関于古小説『香螺卮』」（『明清小説研究』一九九九年第三期）に詳しく紹介されている。内容は文言短編小説集。黄氏論文によれば、例えば卷一所収の「漢 龔勝『大將軍梁商小女傳』」は明の楊慎「雜事秘辛」と基本的に同内容であり、かつ附された周之標の評語も楊慎の跋文とほぼ同じであることから、これらの「古小説」やその作者名は周之標が偽造したものであるという。

封面や序は存せず刊記も無いが、版心下に「益吾原板」とある。万曆期に活動した蘇州の書坊主錢益吾であろう（後述）。卷一卷頭に「長洲 周之標君建甫選評／同社 徐文衡以平参訂」とあり、以下各巻に異なる参訂者名が書かれる。また各小説の末尾に周之標や「同社」の人々による評語が附される。これらの参訂者や批評者の多くは、他の周之標の編纂書籍にも参与している。卷二の参訂者は『蘭咳集』『蘭咳二集』にも関わった申紹芳であり、彼は卷二所収の小説五編に評語を附している。卷四の参訂者湯本沛（字は行仲）、卷五の呉彦芳（字は友聖）、卷八の徐遵湯（字は仲昭）、卷九の曹璣（字は子玉）は『蘭咳二集』の「参訂社友姓氏」にも名を連ねている。卷四「杜子春伝」の評は『呉姬百媚』にも登場した馮夢龍が行っている。「同社」と冠することから、彼らは何らかの文社を結成しており、周之標はそのリーダーであったと考えられる。

⑦ 『四六瑄朗集』八卷

中国人民大学図書館蔵。筆者未見。ウェブサイト「高校古文献資源庫」で公開されている同図書館の書誌には「周之標選輯 周亮工参訂 呉思穆参訂 順治癸巳（十年、一六五三）」とある。<sup>26</sup>周亮工は『蘭咳二集』の「参訂社友姓氏」にも名があり、また呉思穆は『香螺卮』卷三の参訂者でもある。

書題から駢文集と推測される。いわゆる卒業書の種類であろう。これに関連して、周之標が天啓年間に卒業書の編纂者として一定の知名度を獲得していたらしい記録がある。李雲翔『新鐫六院女史清流北調詞曲』（天啓六年序、天理図書館蔵。以下『北調詞曲』と呼称）中の龐雲衢「徵文啓」に、「今日名公」「諸先生」として、十六名の人物が挙げられており、張鼎・陳仁錫・鍾惺などの著名文人やその他諸生と並び『北調詞曲』の著者である李雲翔、そして周之標の名が見える。彼らは様々な書物の選評や解説を編纂して卒業書の類を著す「藝林の先鞭」とされている。周之標は郷試を通過した記録も無く、生涯生員の身分であったと考えられるが、その文名は広く認められていたようである。

⑧ 胡貞波『周君建鑑定古牌譜』二卷

中国国家図書館蔵。『中華再造善本』（明代編子部、国家図書館出版社、二〇一二年）に影印がある。牌九という賭博で用いられる骨牌の図柄（○や●で表記される）と、それに平仄や韻を対応させた古今の詩句を列挙したものの『紅樓夢』第四十回で、牌の組み合わせに応じて即興で詩や慣用表現を言い当てる酒令の様子が描かれており、本書も同様の遊戯のために作られたものであろう。著者の胡貞波（字は氷心）は周之標の妻。周之標「序牌譜」に、  
 近く吾家の氷心氏の如きは、琴を能くし、簫を能くし、能く音律・古今人の詩を曉り、披覽せざるは靡く、  
 間ま亦た短吟して長咏する能わず。余舊より牌譜有るも未だ全うせざるなり。氷心氏胸中の詩註を出だし補いて遺すところ無し。余見て之れを異として曰く、「此れ騷壇の鼓吹、酒社の笙竽なり」と。……譜は筒中に藏し、日を爲すこと已に久し、近く余『女中七才子』一書を刻す、因りて此の譜を憶い、附して以て傳う可し。とあり、周之標が途中まで作製していた牌譜を、妻の胡貞波がその才知でもって余すところなく完成させ、『蘭咳集』を刊刻するにあたりこれを附録としたことが記されている。

⑨ 沈自晋『広輯詞隱先生增訂南九宮詞譜』二十六卷

中国国家図書館、国立故宫博物院図書館（台湾）等蔵。南曲の曲譜で、通称『南詞新譜』。沈自晋（一五八三—一六六五）が叔父沈璟の『南九宮十三調曲譜』二十二卷を増訂したもの。周之標の名は「重訂南詞新譜參閱姓氏」に見え、ほかに馮夢龍、吳偉業、李漁等、総勢九十五名が列なる。沈自晋「重定南詞全譜凡例續記」に「時丁亥秋七

月既望吳江沈自晉重書于越溪小隱」とあり、沈自南「重定南九宮新譜序」に「乙未菊月弟自南述」とあるので、本書の完成は順治四年（一六四六）、刊行は順治十二年（一六五五）頃と考えられる。沈自晋の凡例続記には、崇禎十七年（順治元年、一六四四）に馮夢龍が彼に沈璟の曲譜の修訂を勧めたと記されており、おそらく周之標が本書に関与したのも順治元々四年の間であろう。

⑫ 『万錦清音』花集「空閨感夢」

中国国家図書館（存四卷）、中国芸術研究院戲曲研究所蔵（七卷、筆者未見）。ただし尤海燕「兩種折子戲集《万錦清音》考辨」（『四川戲劇』二〇〇九年三期）によれば、両者は別本であるという。前者は封面・目錄など欠損し刊年不明。後者は完本で、巻頭に『方米館合選古今傳奇万錦清音』と題し、序末に「順治辛丑（十八年、一六六一）臘月方米館主人題」とある（尤氏論文による）。

折子戲や散曲の選集。上下二段組で、上欄に散曲、下欄に折子戲が書かれている。中国国家図書館蔵本の第二冊花集五十五葉表上欄に「空閨感夢 周君建」と題し【二郎神】を収録する。五十五葉裏を欠き、五十六葉表々五十六葉裏に【金衣公子】【琥珀猫兒墜】【尾声】がある。途中の欠葉はあるが、いずれも南曲商調の曲牌であるから、一連の曲と考えて良いであろう。

⑬ 錢尚濠『買愁集』卷三哀書「天涯女子」「小青焚余詩」評語・唱和詩賦

『買愁集』は中国国家図書館、ハーバード大学燕京図書館等蔵。『四庫未収書輯刊』に影印があるほか、点校本が『中国文学珍本叢書』（貝葉山房、一九三六年）に収められている。全四集。各集に想書・恨書・哀書・悟書の集名が付けられている。その巻三（哀書）所収「天涯女子」「小青焚余詩」条に、周之標の評語と唱和詩賦が附されている。「天涯女子」は杜瓊枝、「小青」は馮小青。二人とも『蘭咳集』収録の女性詩人であるが、『買愁集』所収の周之標の評語や詩賦は『蘭咳集』中に見えない。楊国玉「錢尚濠『買愁集』編刊年代小考」（『河北工程大学学報（社会科学版）二〇一六年第三期）によれば、『買愁集』の編刊時期は順治二々十七年（一六四五—一六六〇）の間という。

以上の調査結果に基づき、周之標の事蹟を編年すると次のようになる。

1. 万曆四十四年（一六一六）、①『呉歛萃雅』を編纂。
2. 万曆四十五年（一六一七）、③『呉姫百媚』を編纂。
3. 万曆末〜泰昌年間（一六二〇前後）、②『珊瑚集』を編纂・増訂。
4. 天啓六年（一六二六）頃、挙業書の編纂者として活躍。
5. 崇禎二〜三年（一六二九—一六三〇）、祁彪佳が袁于令宛ての書簡で周之標の戯曲を求めらる。
6. 順治元〜四年（一六四四—一六四七）、⑨『南詞新譜』の増訂に参与。
7. 順治二〜十年（一六四五—一六五三）、④『蘭咳集』⑤『蘭咳二集』を編纂。

同時期に⑧『古牌譜』を鑑定し『蘭咳集』に附して出版。  
⑧ 順治十年（一六五三）、⑦『四六瑄朗集』を編纂。

⑥『香螺卮』の編纂・批評は馮夢龍の存命中である順治三年以前に成立した可能性が高いが、『南詞新譜』の如く馮夢龍没後に完成をみた例もあり、時期断定の証拠に乏しい。⑫『万錦清音』所収曲の創作時期も不明。⑬『買愁集』所収の批評と唱和作品については、『買愁集』の成立年代の幅が広く特定は難しいが、周之標が女性の詩作に関心を持っていた清初の7頃と考えられる。

### 三 筆名「宛瑜子」について

『呉姫百媚』と『珊瑚集』の編者「宛瑜子」は、周之標なのか、兪琬綸なのか。まずは従来の説を確認しておきたい。周之標説の根拠は、『珊瑚集』の周之標序に「仍屬余手自増定（自ら珊瑚集を増訂した）」とあること、その『珊瑚集』は『呉歛萃雅』の続編であり、『呉歛萃雅』の編者である梯月主人も周之標その人と考えられること、以上の二点であった。一方、大木氏による兪琬綸説の根拠は、兪琬綸の文集『自娛集』に、『呉姫百媚』にも名前の見える妓女を詠じた詩や曲が収められていること、『自娛集』巻八に馮夢龍の俗曲集『掛枝児』に序した「打棗竿小引」が収録され、「蓋し吾と猶龍とは、俱に童知有り、更に情種多し（蓋吾與猶龍、俱有童知、更多情種）」とあって馮夢

龍との交友が認められること、の二点である（注21大木氏著書による）。筆名「宛瑜子」と実名「兪琬綸（一作兪宛綸）」の近似も無視できない。

さて、両説の根拠のうち、最も手堅いと思われるのが、周之標説の「仍屬余手自増定」に基づくものである。だがこの根拠にも問題がないわけではない。『珊瑚集』周序「仍屬余手自増定」の前には次の文章がある。

（『珊瑚集』は）顧みるに獨り戯曲多くして時曲少なく、即ち自ら其の聲價を高くして識者相い與に之れを娯笑す。……向に余の序す『吳歛萃雅』、海内輒ち嗜痴と爲す。此の刻老いたり。『珊瑚集』繼ぎて起こり、仍お余の手に屬きて自ら増定す。

これを虚心に解せば、周之標が増訂する前の、旧『珊瑚集』が存在したと考えるべきであろう。来虹閣主人の「凡例」にも「書名は古いままだが、曲は新しいものを選んだ（此刻名仍其舊、曲摘其新）」とある。その上で、「仍屬余手自増定」とは、『吳歛萃雅』の後を継いだ旧『珊瑚集』の欠点を補うべく、『吳歛萃雅』に関わった私自らが増訂を施した」という意味になるのではないか。周之標の仕事を増訂のみに限定すれば、『珊瑚集』巻頭の「吳中宛瑜子」は増訂前の旧『珊瑚集』の編者名ということになる。それは、或いは兪琬綸であるかもしれない。

筆者は『吳姫百媚』の中に見える次の二点の記述により、周之標説を支持したい。

まず、『吳姫百媚』巻一の会魁張二の宛瑜子総評に、「乙卯の役、鍛羽して南還し、毘陵の友人虎丘に至り小集す。泛艇の中、忽ち麗姫の妖姿艶質、人をして目眩魂揺せしむるを見る」とある。「乙卯の役」で失意して南に還つてきた、というのは、「乙卯」すなわち万曆四十三年（一六一五）に南京で開催された郷試に落第し、蘇州に戻つてきた、という意味であろう。兪琬綸は万曆四十一年（一六一三）に既に進士及第しているので、この宛瑜子の言と合致しない。

また、『吳姫百媚』巻一の探花蔣五にある曲には「友人に代わり追憶した作、せりふと仕草つき（代友人追思作、附介白）」と注がつけられ、蔣五と別離した後の男性の想いが歌やせりふで綴られている。作者は宛瑜子であろう。その白に「仰蘇山樓の宛瑜子を訪ねて、酒を飲み、相對して少しばかりお喋りをしよう。君との一晚の会話は、十年の読書に勝るといふことだ（訪宛瑜子於仰蘇山樓、索酒相對、問話片時、可又道是與君一夕話、勝讀十年書）」と

いう部分がある。「仰蘇山樓」は、虎丘の名所の一つである仰蘇樓<sup>②</sup>か。実は『残唐五代史演義伝』の周之標序に「長洲周之標君建甫題於仰蘇樓」とあり、宛瑜子と周之標は同地に滞在した共通点を有する。いずれも決定的な証拠ではないが、宛瑜子と周之標説の傍証となり得るのではないだろうか。

#### 四 小結

周之標は万曆四十四年から順治十年の間、蘇州を拠点として編著活動を展開していた。その事蹟を時系列順に通覧すると、詞曲の創作と選集編纂を中心としつつ、清以降は女性著作の編集出版へと移行している。筆者は中でも初期における妓女との交流が、周之標の活動遍歴の基礎を築いたのではないかと考える。彼は花案を編むほど花街に通じ、かつ戯曲・散曲の実作者としても一定の知名度を獲得していた。『呉歛萃雅』や『珊瑚集』といった実演を意識した散曲選集は、宴席で歌曲を披露する妓女もその受容者として意識されていた可能性がある。また花案『呉姫百媚』も単なる妓女品評の書ではない。良家に生まれながら妓楼に身を落とした女性への同情や、周之標より優れた作曲の能力をもつ妓女への称賛<sup>③</sup>などが綴られ、周之標の彼女たちに対する敬意や愛情の眼差しが読み取れる。こうした女性観が後の女性著作の出版活動に繋がったのではないか。『蘭咳集』には「怨姫愁女」の詩歌を集め、「古牌譜」序では「女子は才能が無いことこそ徳である（女子無才便是徳）」といった一般的女性観を批判し、妻の文学・芸術的才能を高く評価している。女性文学への注目や評価の高まりは明清交代期の文人の間でしばしば見られるが、周之標の場合、その女性観や女性文学観は、妓女との交流によって培われたのではないだろうか。

また、もう一人の『封神演義』序文撰者たる李雲翔と共通点があることにも注目したい。彼らは共に花案を主催し、詞曲創作を行い、諸生の身分でありながら卒業書を編纂して「名公」と呼ばれた。両者をつなぐ馮夢龍の存在も看過できない。彼は周之標の『呉姫百媚』と『香螺卮』に参与し、『南詞新譜』でも周と共に参関に加わっている。特に『呉姫百媚』については、やはり馮が深く関与した李雲翔の花案『金陵百媚』と構成上の共通点が多く、序年も『呉姫百媚』が万曆四十五年、『金陵百媚』が万曆四十六年と前後している。加えて『香螺卮』の出版者銭益

吾は、『金陵百媚』の出版者でもある（『金陵百媚』封面に「閨門錢益吾梓行」とある）。馮夢龍を仲介として、周之標と李雲翔は何らかの交流を持っていた可能性も考えうる。李雲翔の活動が南京秦淮の妓楼を中心としたものであることから、想像を逞しくすれば、彼らは南京での郷試後に秦淮で宴席をともにしていたかもしれない。

『封神演義』に序文を書いた周之標と李雲翔は、共に生員でありながら書籍の編集出版を生業とし、かつ妓楼に通じ、詞曲を得意とした。このことは『封神演義』という小説が、科挙を受験し、妓楼で遊び、詞曲を嗜む、そのような教養と財力を備えた階層の人々によって書籍化され、また受容されたことを示している。書籍化の際に、彼らの知識や嗜好が作品に反映された可能性もあるのではないか。序文撰者の事蹟や人物像は『封神演義』の内容分析や受容層の解明にも関連すると考えられる。本文や評語も併せて詳細な検討が必要であり、今後の課題としたい。

## 注

- (1) 李雲翔については、周明初「李雲翔生平事跡輯考及《封神演義》諸問題的新認識」（『文学遺産』二〇一四年第六期）、拙稿「李雲翔の南京秦淮における交友と編著活動」（『中国文学論集』第四十三号、九州大学中国文学会、二〇一四年）参照。
- (2) 舒本の刊刻者については、上原究一「いわゆる舒載陽本『封神演義』の刊行者について」（『山梨大学国語・国文と国語教育』第二十二号、山梨大学国語国文学会、二〇一八年）参照。
- (3) 孫楷第『中国通俗小説書目』（中華書局、二〇一二年版）によれば、北京大学図書館蔵「清覆明本」と「蔚文堂覆明本」が周序を掲載するという（此二本均載長洲周之標君建序）が、周序のみか褚序との併載かは不明。筆者未見。
- (4) 現時点で筆者が把握している褚序・周序併載の版本として、フランス国立図書館蔵清籟閣蔵板本・東北大学狩野文庫および哈仏燕京図書館蔵本衛蔵版本がある。
- (5) 尾崎勤「『封神演義』の簡本について」（『汲古』第五十一号、古典研究会、二〇〇七年）参照。
- (6) 戚氏論文では『女中七才子蘭咳二集』の支如増序に「吾友君建氏具有慧業、足秤量千古、乃女中才子、適湊於數十

季間、得恣其秤量」とあることを根拠として周之標女性説を主張する（杜信孚『全明分省分県刻書考』（線装書局、二〇〇一年）江蘇家刻卷も「周之標（女性）」と著録）。しかし、この「女中才子」は周之標を指すのではなく、彼が選抜した女性詩人を指す。張燕嬰「明末出版家周之標不是女性」（『新世紀図書館』二〇一四年第五期）には他にも周之標を男性と見るべき複数の証拠が挙げられている。

- (7) 戚氏は他に『賽徵歌集』六卷（影印は王秋桂主編『善本戲曲叢刊』第四輯四、台湾学生書局、一九八七年収録）を挙げる。許培基・葉瑞宝『江蘇芸文志』蘇州卷（江蘇人民出版社、一九九四年）所引『吳県志』芸文考三に、周之標の著作として『賽徵歌集』が挙げられているという（筆者未見）。しかし筆者が確認した『民国吳県志』（『中国地方志集成』江蘇府縣志輯、江蘇古籍出版社、一九九一年）中に該当の記述は見えなかった。そもそも『賽徵歌集』は著者名だけでなく序文にすら署名が無く、選者不明である。本稿ではひとまず該書を周之標の事蹟に数えないこととする。
- (8) 戚氏・王氏論文では『珊瑚集』とするが、明らかな誤りである。

- (9) 「天涯女子」の周之標評については、合山究「女子題壁詩考」（『明清時代の女性と文学』所収、汲古書院、二〇〇六年）に言及がある。

- (10) 王秋桂主編『善本戲曲叢刊』第二輯二、台湾学生書局、一九八四年。影印の底本を明記しないが、故宮博物院蔵本（北平図書館旧蔵）であろう。

- (11) 復旦大学図書館所蔵本（元巻のみ、索書号五一四二二）も梯月主人の叙を有するが、加えて「去六主人題」と署する序文も掲載され、かつ元巻巻頭に梯月主人・隱之道民のほか「武林 去六主人訂証」の一行が増加、本文もこれに合わせて一行ずれ、一葉裏の五行目末二字を双行にする。図像も他本と比較して平板で簡略な印象があり、概本はおそらく改版された後印本と考えられる。去六主人なる人物の序や訂証も改版の際に施されたものであろう。

- (12) （題辞・小引）玩其語意、當出同一人之手、然則梯月主人即周之標也。之標事蹟無攷、余僅憶明末清初間刻本《封神演義》有之標序、殆其人清初猶存。茂苑即長洲、疑之標與名畫家周之冕爲兄弟行也。

- (13) 注6張氏論文参照。なお張氏は「宣室志」「周生」を引用した祝穆『事文類從』の「梯雲取月」を引く。

- (14) 『善本戲曲叢刊』第二輯三。底本は『呉歛萃雅』同様、故宮博物院蔵本と推定される。



- (15) ただし中国国家図書館蔵本は分冊不分巻、巻名を欠き、かつ巻一・二にあたる二冊のみを存する。
- (16) 原題「吳中宛瑜子手定」、《凡例》末署「來虹閣主人謹識」、前有周之標序、謂爲其手自增訂武林所刻《珊瑚集》而成、則宛瑜・來虹、並爲之標自號矣。之標有《吳歛萃雅》、是書即繼《萃雅》而作、自擬之爲姊妹書。《珊瑚》原集戲曲多而時曲少、《凡例》謂「此刻以時曲爲主、故時曲增十之五、戲曲增十之三」也。《北京圖書館善本書目》著錄爲崇禎刻本、余以卷內「校」字不諱、必刻於崇禎以前、因改題爲萬曆刻本。
- (17) 向承仁兄所諸諸曲古曲如「黃孝子」・「十孝」等記、新曲如周君建所作、望之甚于饑渴、不能不向知己再索也。(祁彪佳「遠山堂尺牘」「与袁晁公」、南京圖書館藏明抄本、筆者未見。前掲戚氏論文、および譚坤「祁彪佳与晚明曲家交游考」(《中華戲曲》二〇〇七年第一期)、趙素文「晚明戲曲家祁彪佳与袁于令的交游」(《九江学院学报》(哲学社会科学版)二〇一〇年第二期)参照。以下同。)
- (18) 仁兄倘見有佳傳奇、乞多命記室錄之、弟當一一備筆賞及優人傳寫之例銀、覓便羽奉來。昨小札中所諄囑欲得者、古本也。新本如周君建之「十快」・「魏璫傳奇」、范香令之「花筵賺」・「楊雄斑管」、顧九疇乃翁之「天公醉」、俱函欲一觀者、萬惟仁兄留神。
- (19) 『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』(名古屋市教育委員会、一九七五年)の「吳姬百媚」条には「寛永六年買本」とある。当年は明の崇禎二年(一六二九)、その直前の丁巳は万曆四十五年である。
- (20) 王重民『中国善本書提要』六九九頁、合山究「花案・花榜考」(『明清時代の女性と文学』所収)、前掲王氏論文等。『中華再造善本統編総目提要』(国家図書館出版社、二〇一七年)「吳姬百媚」項も同説を採る。
- (21) 大木康『蘇州花街散步 山塘街の物語』(汲古書院、二〇一七年)一一五頁。なお該書の一四〇―一三三頁に『吳姬百媚』について詳しく述べられている。
- (22) 詳細は注21大木氏著書、および同氏『馮夢龍「山歌」の研究 中国明代の通俗歌謡』(東京大学東洋文化研究所、二〇〇三年、二三五―二三九頁)参照。
- (23) 余偶輯『蘭咳集』成、質之青門申少司農、知其長日無事、讀書自娛、必有餘閒、爲吾玄晏也。青門性慧、一目十行俱下、笑謂余曰、「七才子得子表而出之、……然都是怨姬愁女、且大半在小星之列。尹少君與劉晉仲解元、有伉儷之

雅、晉仲又子友也。留以待闈中七才子、如徐小淑・陸卿子輩、更得子表而出之、豈不炳炳烺烺、更足千古。」……青門復從難弟霖臣所、搜得『露書』一冊、載有劉玄芝宮詞百首、選存三十七首、欲余取代尹少君詩。余咲曰、「兩才豈相厄哉。」遂附集中卷四之後、先以公諸海內。當今固不乏才、闈中七才子、更爲訂而入之可也。

(24) 顧炎武『聖安本紀』(『南明史料八種』、江蘇古籍出版社、一九九九年所収)上 崇禎十七年(一六四四)八月癸未に、「以前福建布政使司左布政使申紹芳爲戶部右侍郎兼都察院右僉都御史、督餉江北」とある。

(25) ウェブサイト「高校古文獻資源庫 (<http://hsc.calis.edu.cn:8086/aopac.jsp/indexXyig.jsp>)」参照。

(26) 夫海内文章蔚起、名公鉅儒、揆藻抒奇。或選述書史、著輯墳典、托興喻物、繼往開來、厥功匪細。若今日名公、如張侗初、陳明卿、徐筆洞、鍾伯敬、袁小修、陳眉公、鮑在齊、黃贊伯、陳古伯、馬君常、何悲鳴、李爲霖、李子素、周君建、周介生、支小白、諸先生刪煩訂訛、采擇群書、以策後學、其爲藝林先鞭非乎。

(27) 井波陵一『新訳紅樓夢』第三冊(岩波書店、二〇一三年)第四十回の注を参照。

(28) 近如吾家冰心氏、能琴・能簫・能曉音律・古今人詩、靡不披覽、聞亦短吟、而不能長咏。余舊有牌譜而未全也。冰心氏出胸中之詩詮補無遺。余見而異之曰、「此騷壇之鼓吹、酒社之笙竿也。」……譜藏箜中、爲日已久、近余刻『女中七才子』一書、因憶此譜可附以傳。

(29) 『珊瑚集』顧獨戲曲多而時曲少、即自高其聲價而識者相與姍笑之。……向余序『吳歎萃雅』海内輒爲嗜痴、此刻老矣。『珊瑚集』繼起、仍屬余手自増定。

(30) 乙卯之役、綴羽南還、毘陵友人至虎丘小集。泛艇中忽見麗姬、妖姿艷質令人目眩魂搖。

(31) なお、李雲翔も『金陵百媚』の序において、南京で「綴羽」し鬱々としていたところ、呉の友人に誘われて妓楼に遊んだ、と述べている(予茲歳綴羽金陵、旅中甚寥寂。偶吳中友人過予處、……因借予遊諸院、遍閱麗人)。注1周氏論文、注21大木氏著書一六頁参照。

(32) 蘇軾が滞在了たと伝えられる場所に作られた楼閣。天王殿の東に位置する。明末の郭諫臣(一五二四―一五八〇)に「仰蘇樓晚眺」詩(『鯤溟詩集』卷二)、黎遂球(一六〇二―一六四六)に「借說虎丘仰蘇樓」詩(『蓮須閣集』卷四)があるほか、清の康熙帝が南巡の際に立ち寄っている。

(33) 卷一の五名会魁馬観(字は幼蘭)の宛瑜子総評には、もと良家の娘であつた馬観が、三度も結婚に失敗し妓女となつた不遇な経緯が語られる(幼蘭本良家女、初適士人兩歳相背、再適人而遂強之獻笑。晨夕悲惋、玉峰金生憐而之収、金婦妬絶反計陷金生以致假命評告、金生遂失青衿。而再適之人、渡逼之爲不良矣)。

(34) 八名会魁金湘(字は驚洛)の宛瑜子評に、金湘が宛瑜子に歌の勝負を挑み、宛瑜子は二度も敗北、彼女の歌声が素晴らしかつたことが書かれており、彼女を「奇女郎」と称賛している。(迫余賭勝度曲、余兩敗而後勝。驚洛纔一飛聲、聽者雲集、無不嘆賞。……真輩中奇女郎也)。

(35) 注9合山氏著書、陳広宏「中晚明女性詩歌總集編刊宗旨及選録標準文化解説」(『中国典籍与文化』二〇〇七年第一期)、胡文楷編著・張宏生等増訂『歷代婦女著作考(増訂本)』(上海古籍出版社、二〇〇八年)等参照。